

市長と話そう会（武雄市連合 PTA）

日 時：令和 7 年 7 月 1 5 日（火）

1 9：0 0～2 0：3 0

場 所：武雄中学校コミュニティルーム

参加者：武雄市連合 PTA 単 P 会長

約 2 0 名



市民のみなさまと市長が直接語り合う「市長と話そう会」第 4 0 回は、「武雄市連合 PTA」のみなさまと、教育 DX や不登校のことになどについて幅広く意見交換しました。以下抜粋して掲載します。

○教育 DX について

（参加者）

- ・ 私たちが小中学生の頃とはもう全然違う学校だなというところが率直なことで、子どもたちに教育 DX に対して、何も全然先輩でもないで、何も言ってあげられないっていうのが一番あると思う。ただ、先人たちのことを考えたときに、昔は先生が教室で黒板に書いて、生徒たちに教えて、そこで教育、学びが面白い、楽しいっていうことでどんどん上を目指して行って、市長みたいに東大まで行った人もいるわけですね。やっぱりそういう人はそういう人でやっぱりいると思う。自分みたいに全然勉強わからなくなっていう感じで行く人もおれば、先生が言っていることがすごくわかる。面白い。その明日の勉強、明日の授業のことを予習していこう。そこまでやっぱりそういう先人たちもいて、立派な日本ができたっていう事実もあるというのはもう間違いないことであって、ただやっぱりそれについていけない子どももいっぱいいるんですよね。だから、そういう子たちに対して、その DX を使って、こういうことができるんだ。こういう勉強の仕方もあるんだ。これ面白いって思ってくれば、本当に一番いいと思うんですけど、なかなか私たちがそういう世代で育ってないので、わかりづらいんですけども、そこを伸ばせる子どもも DX があるからこそ伸びる子どもっていうのと、その DX が別になくても、もう勉強が面白くてやりたくてしょうがないっていう子どももいると思う。そこもうまく子どもたちが共存して、学んでいけるような時代が今後来れば、すごくいい日本ができているのかなと。あまり頼りすぎてもいかなのかなという気持ちもある。今後どういう風に進んでいくのか見守っていききたいと思う。

（市長）

- ・ デジタル DX って我々はあのデジタル信者では当然なくて、やっぱりこう大事なのは、ひとりひとりの子にあった、教育というか、みんなの支援。その中で医療的ケアが必要だった子どもも、デジタルを使うことで人とコミュニケーションが取れたり、世界ともコミュニケーションが取れたりということで、世界がすごく広がったっていうのもありますし、一方で、全然デジタルを使わなくても私はいいと思いますし、どっちかというあんまりデジタルに詳しくないので、今もノート使ってるぐらいアナログなんですけれども、とにかく、武器であることは間違いないけども、これを絶対化するんじゃなくて、こういうのもあるよ、でも

あなたは何がしたいんだという時に、必要だったらデジタル使えるし、そうじゃなかったらアナログでやっていけばいいってことで、なんか武器が一つ増えたぐらいな感じで、子どもには接するのがいいのではと思う。その後で何をやりたいか。例えば農業であっても、ひょっとしたら ICT 使うと思っているかもしれないし、大工とか宮大工でもデジタルがあったらもっとこういうことができるというのがあるかもしれないし、でもやっぱりゲームもアナログというか感性であったりですね、実際何かと接してやるっていうようなところも大事だろうし、ということなんで、すでに我々はそこを考えていかなきゃならない。これは我々是一个の武器ぐらいで持っておく。ただ実際 AI が当たり前の社会っていうのも想像つかないんですけども、来るのは間違いない時に、それに急に溺れたりとか、過信したりとかにならないようにしておく必要もあるし、うまく使える、泳ぎこなせる、波にうまく乗れるような教育はしておく必要があるなとは思ってます。

(参加者)

- ・武器を 1 つ与えられてそれをうまく師匠が言って使えばいいんですけど、やはり逆にまたそれをいろんなものに使うというパターンもある。やっぱりいい武器にも悪い武器にもなると思うので、やっぱりその使い方の教育をしないといけないと思います。

(市長)

- ・わかりやすく言うと、包丁ですよ。包丁は、とても料理には便利だけど、使い方では人を殺傷してしまう。そういうところでしょうね。そういったデジタルですよ。僕もすごくデジタルリテラシーを心配してるんですよ。多分 PTA の皆さんもそうだと思うんですよ。そのあたりは教育委員会でどうしているのか。

(新しい学校づくり課 浦郷係長)

- ・基本的な考え方としては、いろんなツールを使っていく以上は、情報モラル教育を充実していく必要があるというふうに考えています。どうしてもこれから子どもたちは、間違いなくデジタル社会に触れなければなりません。それまでまったく触れないままというのは限界があります。社会に出る手前にこういったことに使うと、こういうことがあるんだということを知っておくことは大事だと思っています。そのためには、学校という場面で ICT をしっかり使っていただくことで、準備をしていくということに取り組んでいる。

(市長)

- ・LINE グループでいじめがあるとかですね、これからの社会でよく言われてますけど、そういうのを考えると、自分の娘が当事者だったらどうすればいいんだろうと、単純に親として思ったんですけども、やっぱりそういったデジタルだけで繋がってて、そこを抜けるともう孤独になるみたいなものもあるんでしょうか。そういうことも依存しないというところのモラル教育なんですかね。デジタルのモラルの部分には、おそらく学校だけでできないというか、学校だけでは完結しなくて、保護者となると、育友会の皆さんですね、PTA としてどういうことができるんだろうとか、考えられたり悩まれたりしてたりするのかなと思うんですけども、その辺は何かありますか。例えば、学校にもっとこういうことをやってもらったらいいいんじゃないかっていう学校側へ期待するところ。もう一つは、育友会としてもっとこういうことができるんじゃないかっていうことで、考えていることだったり、悩みだったりですね。この場で全部解決するとは思わないので、なんかそういうのってありますか。

(参加者)

- ・DXのお話をしていただいて、多分皆さんものすごく分かりやすかったんじゃないかなって思ったんですけど、学校でどこまでこう進んでいるかって言ったら、なかなかこう保護者の立ち位置としてはちょっと分かりづらくなっていう、そういうのがなかなかこう、先生方がこう頑張って、されていることが大事かなと思いながら、一応先生にこうされたってやったりというのもあると思う。だから、DXはこういう風にやってるっていうのを、もうちょっとでも学校とかから説明をしていただいたら、もう少しこう分かりやすかったりするのかなってというのは今日聞いて、ものすごく分かりやすかったんで思った。
- ・こういう風に個別に時間をかけた説明を聞いて、あ、なるほどねっていうところは国の考えも含めて確かにあった。実はこういうことですよっていうことで保護者としてもああ、なるほどと思えた。

(市長)

- ・今お話あったように、具体的にじゃあ何をやってるのかっていうのをもっと見えるようにする必要がありますね。

(新しい学校づくり課 浦郷係長)

- ・取り組みの見える化っていうのは、力を入れているところではあるんですが、まだ。我々の力不足で届いていないということを感じさせていただいたので、今後ますます力を入れていきたいなと思っています。考え方そのものについては、ぜひ分かっていたきたいという思いも含めて、6月の市報で、これからの学校の話をしろうというパンフレットをお届けさせていただきました。これを読んでいただいて、ここまで詳しくは書いてはないんですけども、少しでもきっかけとして、捉えていただけたらありがたいなと思います。それをきっかけとして見ていただいて、我々の取り組みを見ていただくと、また少し見え方が変わってこられるのかなということを少し期待しています。

(参加者)

- ・単Pの活動の中で話に来てくれって言っていたら、こう来ていただける感じですよ。なので、単Pの中でこういう話し合いの場が設けていただければ、また活動がよくなってくるのかなっていうのは、逆によく聞いて思います。

(新しい学校づくり課 浦郷係長)

- ・出前講座のメニューとしてご用意しておりますので、各担当研修会等でお声かけいただけましたら、市長ではないんですけど、説明に伺いたいと思いますので、よろしくお願いします。

(参加者)

- ・極端な話かもしれないが、例えばケーブルテレビの市役所だよりの中で、学校の話をしろうというような項目を数分でもいいので設けて、武雄としてはこういう取り組みをやっていくんですよというのを流したら、「あ、ちょっとその先も知りたいかな」という興味を持つ人が出てくるのではないかな。ふっと目に触れる数分間に武雄の子どもたちがどういうふうにデジタルを使ってやっているのかを観れば「ああ、そうか、こういうことをしている」という一つのきっかけになるのでは。

(新しい学校づくり課 浦郷係長)

- ・教育長がお配りした教育ビジョンの説明をケーブルテレビで行ったり、市民ホールでパネル

展などを行っているが、ちょっとまだまだ充分ではなかったなって感じがありますので、できればワンコーナー取れるかどうかはわからないが、機会を見つけて発信をさせていただきたいと思っていますので、ぜひ見かけられたら、よかったよという声を伝えていただけたら僕らの方がわかりやすくなるのでよろしくお願いします。

○不登校について

(参加者)

- ・子どもによってまったく生きたくない。絶対学校に行きたくない。ただ、たまに行ってもいい。保健室まで行ったら行くよ。いろんなパターンがあると思う。もうちょっと行けるところはうまく利用して、例えば各町公民館だったら行ける子だったらそこで受け入れる体制とかって今のところないんですか。

(多様な学び支援室 武富室長)

- ・今年度から不登校対策検討委員会を立てて、全保護者向けのアンケート調査を行った内容を基に話し合いを行っている。今は全3回のうち2回終了している状況で、中間報告になるが、今でもそういう意見が出ている。やはり学校だけでは解決できないということがあって、おっしゃった通り、例えば家から全く出ることができないという人もいらっしゃるわけです。そういった中には、その福祉の連携があったように、教育委員会の訪問相談でソーシャルワーカーや、各小中学校に配置している笑顔コーディネーターや県の事業などを活用しながら、それぞれの段階において、どこでもどんな機会でも学べる場を設定するのが大切です。一方、市長がおっしゃったように、根本は人とのつながり、そこがないといけないと思っています。公民館という話も、実はもう出ているので。そういうのを取り入れながら、進めていこうと思っています。

(市長)

- ・今の話を聞いて思い出したが子どもの貧困解散に力を入れようとした時に、やっぱり子どもにとって大事なのは居場所だよなって思ったんです。沖縄の浦添市ってところの市長さんと話してた時に、子どもの居場所づくりをどうするかっていう時に、今、政府はあちこちにお金を出して居場所を作ろうとしている。でも実は居場所ってよく考えると、もうまちにあるんじゃないか。例えば、学校には行かないけれども、近所のバイク屋には行く子もいて、そこが彼にとっては学校行かないけど、自分を認めてくれるバイク屋の人がいる。それも立派な居場所なんじゃないか。いっぱい作らなくても、今あるところをもっと思いっきり見直すことで、いろんな場所が居場所になるんじゃないって言われたのを思い出した。その時に、子どもの貧困っていう話で、孤立っていうのを僕はなくしたいと思ったので、居場所をまず作ろうと。大人が自分を見てくれる居場所を作りたいなって思った時に、新たに作るんじゃなくて、今あるところを使えばいいんじゃないかっていうことで、例えば川良区だったら川良っこっていう、第2第4水曜日の3時からやって、これは貧困の子どもだけじゃなくて誰でもいいよっていうふうにやってるんですね。不登校の話とかから今、居場所って出てきたりしたんで、居場所つながりですよ、地域の人から言われたことがあります。不登校対策で地域ができることってなんでしょうかって聞かれても、正直わからないと。いろんなデリケートな話もあるし、地域で不登校対策ってなかなかできないよねっていうふうに言わ

れたりしました。これまでの話もそうですけれども、やっぱり大事なものは人とのつながりだったり、学び以上に、学びも大事だけど、ここが大事だったら場所が公民館でもいいわけで、結構、思ったのはいろんな課題って結構こういったところにつながっているのかなと。そしてここは多分地域でもできるし、そこに保護者も何か協力できたりするところがあるんじゃないかなっていう風に思ってた。これは今皆さんのお話を聞いてて、キーワードかなと思ったので、今後、地域の皆さんと一緒になって考えていくし、決して不登校対策のためではなくて、結構いろんなものを、居場所というか、場所はカバーしていくのかなと思いました。

(参加者)

- ・自分の息子が去年 2 年生の時に不登校になった。その時思ったのは、自分の母親がなんで学校行かないのか、行きなさいと。子どもの成長を知りたいっていうのは分かるが、自分はまあそのうちというところもありました。今年に入って 3 年生になって、自分で学校に行くようになった。その時に自分の母親が 2 年生の時のあれは何だったのか。行っとけばよかったのにと平気で言う。言い方悪いけど、身内に敵がいると思った。不登校が完全に悪いとかではなくて、そういう子もいるよっていうのを知ってもらうことが大事かなと思いました。

(多様な学び支援室 武富室長)

- ・おっしゃる通りですね、特におじいちゃん、おばあちゃん世代とかでは学校に行って当たり前なのに恥ずかしいと思われている。不登校って悪いことじゃなくて、アンケートでお子さんが不登校になった理由の一番は「分からない」なんです。だから本人も分からない、周りも分からない。例えば神村学園では、やっぱり準備期間っていうのが必要なお子さんもいらっしゃるんですよね。その期間を超えたら、人一倍頑張れる子がいて、その期間が人によって違うんです。1 年の子もいれば、もう 3、4 年かかる子もいらっしゃいます。でも、私たちが気をつけないといけないのは、期間が長くなった時に違う方に行ってしまうと、命の大切さ、つまり自殺者が中高生とか小中高生のために過去一になってるんですが、そこに行かないようにすること。やはり人とのつながりを切らさないっていうのが一番大切です。武雄市の不登校支援の目標は、誰かが関わっている比率っていうのを、成果目標に掲げているわけですね。文部科学省が言っている不登校が増えた要因は、学校に対する意識の変化とかですね。コロナとかの影響の動向による変化とか。もう一つはそのさっき障がいの話が少しあったんですが、ちょっと苦手意識を持ってしまうことが背景じゃないかと言われています。要するに「不」登校が悪いわけではなくて、充電期間はあるし、人生の中では必要なこと。そういった周知は、今後も引き続き行っていきたいと思います。

(参加者)

- ・準備期間というふうに考えることも大切だなと思いました。そういった子たちが、何がきっかけでそういった一步を踏み出せるかっていうところが、どこにあったかわからないっていうことがあるのに対しても、市長さんがおっしゃられたとおり、地域の力とか、そういったところも含めて考えるのが大事かなと思う。そこに過度な期待はしてはいけないでしょうけれども、まずは子どもらしくというのが大事かなと思った。

(市長)

- ・今の話で思ったのが、やっぱり僕自身もさっき言いましたけど、不登校対策で、例えば PTA が何できるんだろう、地域が何できるんだろうっていうと、ちょっと悩んでしまうけれども、

つながりを切らさないために何ができるんだろう、子どもと誰かの居場所を作るために何ができるかって考えると、何かまた我々にできることってというのが見つかってくるんじゃないかなと、お話を聞いて改めて思いました。そういうふうになんてちょっと考えを切り替えるだけで、何かもっとできることがありそうな気がしますね。